競技者の現役引退をめぐる困難克服プロセスに関する 社会学的研究：車椅子バスケットボール競技者への キャリア移行を遂げた元Jリーガーのライフストーリー

吉田 毅

Takeshi Yoshida: A sociological study of the process that athletes overcome the challenges and difficulties over retirement: The life history of a former J-League soccer player who accomplished a career transition to wheelchair basketball. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 57: 577-594, December, 2012

Abstract : The purposes of this study were to identify, from a sociological perspective, the main factors involved in the process that a former J-League soccer player overcame the challenges and difficulties over retirement, and to find features that would be informative for athletes facing problems related to retirement from sport. This J-Leaguer became wheelchair-bound after being severely disabled in a traffic accident, and was able to overcome various challenges and difficulties through a career transition to wheelchair basketball. His life history was investigated on the basis of data recorded mainly during interviews. This study was based on the subjective socialization theory, especially Erikson's theory of identity related to subjective action, which is considered to partly overcome the problems associated with contemporary socialization theory, with special reference to the specific significance of individuals who helped the subject to overcome his difficulties.

The difficulties he experienced were related to both retirement and life with a walking disability, the former being in conflict with the subject's strong self-identity as an elite soccer player. The presence of "irreplaceable others", including his wife who devoted herself to his support and their newborn baby, his sense of responsibility for them, and his pride based on self-identity enabled him to exercise his subjectivity (reflexivity), allowing him to overcome his difficulties. In terms of his career transition to wheelchair basketball, "leading others" and "associates" in a wheelchair basketball club played important roles. When athletes retire as players, the following points are considered important for overcoming their associated difficulties. It is vital that the new change of career is well balanced with the athlete's self-identity. The role of others such as "leading others" is influential in finding a suitable career field. Furthermore, it should not be overlooked that the feelings of athletes that allow them to exercise their subjectivity to overcome their difficulties, "irreplaceable others", self-identity which is the main source of such inner feelings, and "associates" in a supporting role are all valuable in this respect.

Key words : subjective socialization, identity, specific others and feelings, disabled person, sports for the disabled

キーワード：主体的社会化, アイデンティティ, 具象的他者と心情, 後天的身体障害者, 障害者スポーツ

I. はじめに

スポーツは今日、ますます高度化、専門化の一途を辿っている。そうした中、ハイレベルの競技

力を保持しようとする競技者には現役引退後の職業（活動）の備えをする暇もないほど競技活動への傾倒を求められ、「引退後のことまで考える余裕はほとんどないのが現実」(コークリー, 1982, p. 193) といっても過言ではない。特にエリート

競技者の現役引退は“social death” (Lerch, 1984; Rosenberg, 1984) と称されるほど危惧を抱かれてきた。実際に、現役引退後の社会生活で不適応状態を呈し、そこから脱却できない者の存在が報告されている (豊田・中込, 1996)。

わが国では近年、こうした競技者の現役引退後の憂慮から、セカンドキャリア (現役引退後の経歴) の制度的支援に関わる施策を講じる気運が高まっている。2000年に策定されたスポーツ振興基本計画ではその主な指針が示され、スポーツ界では程なくJリーグや日本オリンピック委員会等が上記支援の取り組みに着手した。また、学術界でもセカンドキャリアの制度的支援策を立てようとする研究が行われている (吉田ほか, 2006; 吉田ほか, 2007)。今後この種の研究が蓄積され、有効な制度的支援の展開に寄与することが期待されるが、「支援」の社会学が「接近」する、「制度」から『こぼれ落ちる』困難経験を抱える人々」 (崎山, 2008, p. 11) も看過してはなるまい。もとより競技者の現役引退に関する研究領域では、1990年代末までは主に現役引退後の実態の解明や説明理論の構築へ向けた研究が蓄積された (吉田, 1999; 豊田・中込, 2000)。その後は、上記の研究を含め様々な視点からキャリアに着目した検討が進められ (Drahota and Eitzen, 1998; Lavalley and Wylleman, 2000; 吉田, 2006b; Stier, 2007; 鈴木, 2008; 高橋・重野, 2010)、他方ではキャリアとは別に「生命感の次元」を重視する試みも緒についた (小丸, 2010)。しかしながら、さして制度的支援に恵まれない中で現役引退をめぐる深刻 (過酷) な困難を経験した競技者が、それを克服するに至る様相を主眼とした研究はみられない。

従来、競技者の現役引退については、特に他律的なケースの問題性 (深刻さ) が指摘されてきた。Lerch (1984) は、怪我等によって現役引退を余儀なくされた競技者が、その後に情緒的問題に苛まれる恐れがあるとの見解を示した。Werthner and Orlick (1986) は、元オリンピックを対象とした調査を基に、突然の怪我や解雇による思いがけない現役引退がキャリア移行に支障を来すこと

を指摘した。また、Kleiber and Brock (1992) は、怪我によって現役引退したことに加え高いプロ志向を有した競技者が、引退から5—10年後に低い生活満足度を示したことを明らかにした。これらから、他律的な現役引退の中でも特に怪我によるケースが深刻な困難につながる恐れがあることが示唆される。

とりわけ少年期に顕著な活躍をし、競技者の世界へ進路を定めた青年期^{注1)}に突然の怪我で現役引退を余儀なくされた者の場合、生きる意味さえ問われたも同然であり失意の底のごとき深刻 (過酷) な困難が不可避であろう。そうしたエリート競技者がこの種の困難を克服していくプロセスに着目した研究を重ねていくことで、競技者の現役引退ならびに困難克服に関して臨床 (実践) 的にも寄与し得る知見が得られるに違いない^{注2)}。だが、スポーツ社会学の分野では青年期、特に大学生年代以降の競技者については困難それ自体の研究蓄積がなく、困難克服に関する研究 (吉田, 2001, 2006a; 吉田・中島, 2007) が散見されるもののいずれも現役引退に着目したものではない。そのため本稿は、当該事象に関して臨床 (実践) 的寄与を意図する研究の一環として、上記のような競技者の典型的かつ限界的な事例、つまり事故で身体に重度障害を負った元JリーガーK氏の現役引退をめぐる困難克服プロセスについて社会的視座から解明すること、また、それを通じて競技者の現役引退をめぐる困難克服のための要点を導出することを目的とする。彼は競技者にとって究極的と言うべき困難を、基本的に車椅子バスケットボール (以下「車椅子バスケット」と略す) の世界へキャリア移行する形で克服したとみられる^{注3)}。

本稿では、主にインタビューによるライフヒストリー法を用い、語りを基にして検討を行う。ライフヒストリーとは「個人の人生や出来事を伝記的に編集して記録したもの」 (桜井, 2002, p. 58) である。これにより錯綜する要因連関を、対象者の内面も踏まえつつ時間的経過に沿って詳しく捉えることが可能となる (谷, 1996, pp. 10-11)。ライフヒストリーの提示の仕方は、読者に「リア

リティ」を伝えるべく「語りの言葉をそのまま活かした部分と〈わたし〉が解説する部分とを交互に重ねて呈示」する「二重奏形式」(小林, 2000, pp. 106-110)とする^{注4)}。また, 理論的には主体的社会化論に依拠する。上記の先行研究(吉田, 2001)では, 社会化プロセスにおける個人の主体性^{注5)}に着目する主体的社会化論, 特にミード自我論を基調とする主体的行為に関する理論的枠組みが援用されている。この枠組みは, 個人が内省性(主体性)をおし進め問題状況^{注6)}, つまり困難を克服していくプロセスについて説明するものである。困難を経験している最中に内省しない者など通常はいないだろう(豊田, 1999)。困難克服プロセスについて検討する際, 主体的行為に関する理論的枠組みは1つの鍵になると思われる。そもそもこの枠組みは昨今の社会化論の課題(次節で示す)の克服に資するものであり, それに依拠することで社会化論の面でも有意義な知見が得られよう。上記の事例における困難は, 後述するようにアイデンティティをめぐるものと捉えられるため, ここでは主体的行為に関するアイデンティティ論の枠組みが文脈的に適している(吉田, 2001)。ただし, 従来のこの枠組み(以下「従来の枠組み」と略す)を援用するには, 主に次のような2つの問題がある。

1つは, 従来の枠組みには捉え直すべき点があるという問題である。それについては次節で議論するが, 本稿は従来の枠組みを捉え直すことで社会化論の面でも独自性を有することになる。もう1つは, 主体的行為に関する理論的枠組みの援用の仕方の問題である。上記の先行研究(吉田, 2001, 2006a; 吉田・中島, 2007)では主体性ととも他者や心情も要因とされているから, 困難克服プロセスを偏に主体的行為の枠内で捉えようとすることは避けるべきである。この枠組みに囚われると主体性に馴染まない要因は看過ないし軽視され, 要因として主体性が過大評価されかねない。一方, 他者に着目すると, 先行研究では「主として心理的な意味において高い重要性を付与された他者」(後藤, 1988)である重要な他者のとき「情緒的支援者」(吉田, 2001), あるいは

「何気ない他者」(吉田, 2006a)が要因とされている。だが, そうした抽象度の高い概念で他者を捉えるべきか疑問を禁じ得ない。もとより他者とは多様性に富む(井上・船津編, 2005)。社会学的視座から他者について議論する際には, その具象的意味に留意することも重要と思われる。

以上から本稿は, 捉え直した主体的行為に関するアイデンティティ論の枠組みを手がかりに, それによっては説明し得ない要素, 特に困難克服に寄与する他者の具象的意味に留意しつつ, K氏がどのように主体性を発揮し困難を克服したのかについて語りを基に検討する。まず, 従来の枠組みを再考し, その上でK氏のライフヒストリーを記述しよう。

II. 主体的行為に関するアイデンティティ論の枠組み再考

エリクソン(1973)のライフサイクル論において, アイデンティティ論は中核的位置にある^{注7)}。アイデンティティ(以下「ID」と呼ぶ)とは, エリクソン(1982, p. 294)によれば「青年期の自我の最も重要な達成物である」。だが, 社会の構造的変化が著しい今日では, ID形成の問題が青年期に留まらず生涯に亘って生じており(古市, 1990), ID論それ自体が生涯を射程とする枠組みとして扱われている(岡本, 1994; 豊田, 1999)。

では, 従来の枠組みとはどのようなものか^{注8)}。端的に言えば, エリクソンが論じるIDを, エリクソン研究を展開する西平(1993)に依拠し, 機能的・動態的な位相と捉えたものである^{注9)}。西平(1993, p. 204)によれば, エリクソンにおいてIDとは「一方で, 〈わたし〉がこの〈わたし〉であることは何より確かなことであると同時に, しかし他方で, 〈わたし〉は他者から承認されることによってはじめて〈わたし〉である, という二重構造の表現, つまり〈わたし〉における即自的存在様式と対他的存在様式とのズレをもった二重構造を, 一息に掴み取った言葉」である。このようにIDには即自的存在様式と対

他的存在様式があり、従来の枠組みでは前者が「即自相」（「即自的位相」）と、後者が「対他相」（「対他（受身）的位相」）とされる。更に、即自相と対他相の間で惹起される「重大なズレ」の「バランスをとる（保つ）位相」、つまり困難の克服に資する主体性（自律性；内省性、交渉性）を担う「バランス相」があるとされ、ID はこれら 3 つの位相で構成されるものと捉えられている（吉田，2001）。この枠組みは、かかる意味で ID をめぐる困難の主体的な克服プロセスを説明し得るとともに、次のように昨今の社会化論の課題克服へ向けた枠組みとしても有効と考えられる。

昨今の社会化論では、個人の社会化プロセスにおける主体的側面と社会（規範）的・受動的側面とのダイナミズムを捉え得る枠組みが要請されている^{注10)}。こうした課題の克服に資する主体的行為に関する理論的枠組みの端緒はミード自我論、特にシンボリック相互作用論の視座に立つ船津の解釈（以下「船津の自我論」と呼ぶ）に遡る。船津（1983）によれば、それは概ね次のようである。自我には社会（規範）的・受動的側面を表す me（客我）と、me に対する反応ないし反作用を表す I（主我）とがある。I は自我の主体的側面であり、問題を惹起する me を修正、変更、再構成する創発的内省性（自律性）を担っている。換言すれば、問題状況（困難）を主体的に解決していく機能（交渉性も含む）を有する。船津の自我論の枠組みはこうした自我の二重性を備えることで、上記のような社会化論の課題克服に資するとともに、困難の主体的な克服プロセスを説明し得る枠組みとして注目されてきたのである（吉田，1990，2001）。

このような船津の自我論と従来の枠組みとは論理的に同形とみられる。つまり、対他相は me に、バランス相は I に当たり、それゆえに従来の枠組みも昨今の社会化論の課題克服に資する主体的行為に関する理論的枠組みと見做し得る（吉田，2001）。この点は特に問題はないと思われる^{注11)}。では、従来の枠組みで捉え直すべき点とは何か。それは、上記の 3 つの位相とエリクソンの論述との対応関係についてである。それが必

ずしも明確にされてはいない。エリクソンの ID 論と呼ぶからには、氏自身の論述と 3 つの位相との対応関係を明確にすべきである。

エリクソン（1982，p. 294）によれば「アイデンティティの形成には、自己の側面と自我の側面の二つ」があり、「自我の総合化能力をその中心的な心理社会的機能に照らして論議するとき、ひとは自我アイデンティティについて語りうるのであり、また、個人の自己イメージと役割イメージとの統合を論議しているとき、ひとは自己アイデンティティについて語りうる」。氏はこのように、ID について自我（ego）と自己（self）との 2 つの側面に着目し論じている。この点について、船津と同様にシンボリック相互作用論の視座に立つ草津は、「能動的側面である自我アイデンティティ」がミード自我論の I に対応し、自己 ID が me に対応することは「疑い得ない」と指摘する（草津，1977，p. 37）。草津が言う I と me は船津の自我論における各々と同義とみてよいが、草津の見解において、もとより自己イメージと役割イメージといった 2 つの側面がある自己 ID が全面的に me に対応するという点は首肯できない。役割イメージは、自己 ID の社会（対他）的・規範的側面であり対他相に他ならないから me に対応することは理解し得る。しかし自己イメージは、むしろ自己意識（つまり I）のごとき即自相に対応するとみるべきである。また、一致しない対他相と即自相との関係を調整ないし修正するのに「自我の総合化能力」、つまりバランスをとる作用（バランス相の機能）が有用性、必要性を有することになるに違いない。言うまでもなく、この作用を担うのが自我 ID である。

要するに、ID には即自相と対他相があり、これらはいずれも自己 ID に当たる位相である。これらにズレ、換言すればコンフリクトが惹起された困難を経験する状況で、個人はそれを克服するべく自我 ID に当たる位相をおし進め、バランスをとる作用と言うべき主体性（自律性；内省性、交渉性）を発揮するのである。それによって顕現される主体的行為のうち、対他相に適合する行為を適応的行為、即自相に適合する行為を自己実現

的行為、それらの間に位置する行為を創発的行為と呼ぼう（吉田，1992，2001）。次節では、こうした ID 論の枠組みを手がかりに K 氏の困難克服プロセスについて検討する。

Ⅲ. K 氏のライフヒストリー —困難克服プロセスの検討—

K 氏のライフヒストリーを呈示する前に調査について述べておく。まず、K 氏とコーチに対してインタビューを行った。K 氏は、筆者の知人である車椅子バスケットの指導者に紹介して頂いた。K 氏へのインタビューは、2003年12月に彼が出張する際に宿泊したホテルで1時間半ほど、次に2007年9月に彼の試合会場で30分ほど、いずれもメモをとる形式で行った。彼の半生を時系列的に尋ねていった。更に2009年3月、彼の練習拠点である体育館で2時間ほど、テープに録音する形式でそれまでに把握した内容等について時系列的に聞き直し、後にテープ起こしを行った。K 氏とは最初のインタビューの前に、電話で困難の様相等について話を伺っていたことにもより、インタビュー時の「ラポール」に問題はなかったとみられる（桜井，2002，pp. 63-65）。コーチには、K 氏を通じて調査協力の依頼を行った。コーチに対するインタビューは2009年3月、上記の体育館で1時間ほどテープに録音する形式で行った。なお、本稿では K 氏の配偶者の手記も語りと同様に用いる。彼女にそれを借用したいと電話で依頼すると、快く承諾して下さった。

K 氏のライフヒストリーを呈示するにあたり、時系列的に5つの時期に区分するとともに、考察ないし解釈も通例を踏まえその中に組み入れる形とする。以下、「」は対象者の語りや記述をそのまま引用したもの、…は中略、（）は筆者が補足したものである。

1. 高校卒業まで

K 氏は1971年8月、北海道 M 市に3人きょうだい（姉が1人、弟が1人）の第2子として生

まれた。幼少期から「責任感が強く負けず嫌いな反面、「こわがりで内気」な面もあった。小学校に入った頃は父の影響でよく野球を行ったが、全国高校サッカー選手権大会で地元の M 高校が大活躍する様子をテレビでみてサッカーにも関心を持ち始めた。彼は足が速かった。1年からリレーの選手に選ばれ、2年になるとサッカー部へ顧問の先生から誘われた。「断わる理由もなかった」から迷わず入部した。「先生は思いっきり練習をやらせてくれた」。また、基礎をしっかりと教えてくれ、「うまくなるとよく褒めてくれた」。K 氏はそうした中でサッカーが楽しくなり、「もっとうまくなりたい」と練習に熱中するようになった。当初より競技力が秀でており、3年時には上級生にまじって試合に出ることもあった。4年時には補欠ではあったが全国大会の予選にも出場した。強豪の清水 FC との交流試合ではほぼ互角に渡り合えた。彼はこの頃、思い描くプレーがすぐにできるようになったことから、「自分には素質があるんじゃないかと自信を持つようになった」。早くも「サッカーのことしか頭になかった」と言う。K 氏は当時の様子をこう語る。

【語り 1】「僕らが高校3年の時に北海道でちょうど国体があるっていうんで、強化の一環で初めて、4年生の時に集まり（選抜）に呼ばれたんですよ。…その時ぐらいから何となく自分がこう進むべき道というか、そういうものを意識し始めて。で5年生の時にワールドカップがあって、…リトバルスキー（西ドイツの有名選手）が出てたんですよ。…すごいな、ちっちゃくてもこんなできんだ、…いいなあっていう風に思って、自分もこういう世界で戦いたいっていうのが少しずつ芽生えて、プロサッカー選手になりたいっていうのはその辺から思い始めたんですよ」。

彼は小学5年の頃、試合をみに来た M 高の監督 T 先生に「お前（M 高に）来いよ」と誘われた。「子ども心に嬉しくて、絶対行こう」と決意し、自身にとって「サッカーが全て」となった。

【語り1】にも「進むべき道」や「プロサッカー選手に」とあるように、K氏の自己IDの中核は、早期からサッカー一色の状態に形成されていたとみられる。こうした様相は“sport only identification” (Ogilvie and Howe, 1986) と表現し得るだろう。彼は自己ID形成の手がかりを、専らサッカーに求めるようになったのである。

中学校に入るとすぐにレギュラーとなり、引き続きサッカー漬けの日々を送った。コーチは「素人の先生だった」が、「勉強熱心」で「よい影響を受けることができた」。再度の清水FCとの交流試合では大敗を喫し、「ショック」を受けた。3年時には北海道選抜でキャプテンを務めたが、全国大会では数分間しか試合に出場できなかった。この時も悔しい思いをしたが、彼はいずれの際にも「腐ることはまずなかった」と言う。「自分にとってサッカーがどういうものなのかってことを自分自身が一番よく分かって」おり、「次のステップにアップしていった」。K氏のサッカー競技者としての自己IDは中学時代、容易には動じないほど強固な状態になっていたと言えよう。

望み通りM高にスポーツ推薦の特待生（授業料免除）として進んだK氏は入学時、「プロ選手になるには早いうちから活躍しなければ」と思っていたが、1年からエースナンバー10番を背負うことに成功した。更に、北海道選抜に選ばれ国体出場も果たした。最初の全国高校選手権大会では強豪F高に完敗し「ショックを受けた」が、これもバネにして練習に励み続けた。その後もM高の軸として活躍し、引き続き北海道選抜にも選ばれた。いずれにおいても全国大会で上位に入ることはできなかったが、K氏自身は着々と頭角を現し、2年時には日本ユース代表とオリンピック日本代表候補に名を連ねた。3年時には全国高校選手権大会の優秀選手にも選ばれた。

【語り2】「高校の時はね、挫折っていうよりも、（自分を）ますます天狗にさせてしまう出来事が一杯あったんですよ。1年生からレギュラーで。…高校の時に何か挫折っていう部分は、本当に試合に負けて悔しいっていうそれぐ

らいのことしか思い浮かばないですね。何やってもうまくいったような時代でした」。

彼は高校時代、正しくサッカー筋のサクセスストーリーを描き続けた。「ますます天狗にさせてしまう出来事が一杯あった」（【語り2】）と言うように、サッカー競技者としての自己IDをエリート色の濃いものにしていったとみられる。それゆえに卒業後の活躍の舞台を、「サッカーで上を目指すには」といった基準の下、大学よりレベルの高い日本リーグ（Jリーグの前身となる実業団を基調とするリーグ）に求め、複数のクラブや強豪大学から誘われる中で伝統のあるサッカー部を有するF社に就職することにした。

2. 就職から事故・入籍

K氏は就職後、午前中は会社の業務、午後は練習という日々を送った。当初はユース代表とオリンピック代表候補の合宿もあり慌ただしかった。後者として最終選考まで残ったが代表入りは成らなかった。怪我を負っていたため「外れるのは目にみえて」おり、「割り切れた」と言う。F社サッカー部では公式戦デビューを果たした。レギュラーではなかったが各種大会に出場し、「ステップはちゃんと踏めてるなっていう感触はあった」。2年目にはF社を退職する形で、F社サッカー部を前身とするIクラブとプロ契約を結んだ。その後は2年後のJリーグ開幕へ向けプレーを磨いていった。翌年の秋には、わが国で初めてのプロの大会（ヤマザキナビスコ杯）が開催され、巷のJリーグへの関心が高まるとともに、わが国のサッカー界は急速に華やかさを増していった。

プライベートではY氏との交際を着々と進展させた。彼女とは入社して間もない頃、会社の運動会で出会った。当初は「なかなか彼女から相手にはされなかった」が、タイミングを計り「アタックを続けた」結果、彼の思いが叶い交際を始めるに至った。1年後には2人の間で結婚の話をするようになったが、Y氏の両親は暫く結婚に難色を示した。2人とも20歳と若かったこと、K氏がプロサッカー選手という安定した職業ではなか

ったことによるが、結局は2人の熱意によりY氏の両親が折れ結婚を認めてくれた。

4年目の5月、Jリーグが開幕した。前年暮れにはY氏との結婚も決まり、この年は順調に進んできたK氏のサッカー人生の新たな出発点でもあったが事態は暗転する。彼はJリーグ開幕前に怪我を負い、サッカー人生で最初の困難を経験した。

【語り3】「(海外の)キャンプに行った時に怪我したんですよ。…1人で一時帰国して、そこでもまあ挫折ですよ。開幕して、怪我がなきゃいけるのに、なかなか試合に出れないっていう葛藤…一番のサッカーやってる中での葛藤かな。だって、高校卒業してすぐにメンバーに入ってたんで…やっと試合に出たのが、それからまあ半年ぐらい経った時のナビスコ杯ですね。…その後リーグ戦で遠征したんですよ。メンバーで一緒に行って、その前の試合が調子よかったにも拘わらず使ってくれなくて、もうこんなチームではやれないっていう何かそんな思いもありました」。

K氏は就職後、程なく公式戦に出場できたことでエリート的サッカー競技者としての自己IDを強化したであろうが、Jリーグには出場できず「挫折」した。前節で捉え直したID論の枠組みによれば、この際の困難は上記IDの即自相(即自的位相)と規範的に生じた補欠(2軍)としての対他相(対他位的位相)とのコンフリクトに他ならない。彼は移籍を考えるなど、自我IDに当たる位相をおし進め内省性を発揮したとみられるが、その矢先に更なる事態に遭った。

結婚式を2ヶ月後に控えた11月、「結婚式の衣裳合わせに2人で行く予定の日」に事故は起こった。K氏は前夜、仲間との話が延々と続いたことで帰宅が未明となった。車を運転して帰宅する途中、横道から出てきた車を避けようとし、彼の車が電柱に激突した。車は大破した。「自分の命が助かったこと自体が不思議なほど」であった。「いつ救急車で運ばれたのかも覚えて」おら

ず、「気づいたら病院の長椅子に座って」いた。「肋骨がすごく痛くて…動揺」しており、再び「気づいたら、ベッド」に寝ていたと言う。

K氏は意識が戻った際に看護師から連絡先を聞かれ、Y氏の自宅の電話番号を伝えていた。Y氏は病院側からの電話で事情を聞くと「頭の中が真っ白」になり身体が震えた。病院までは電車で2時間ほどかかった。その間、「不安が次から次へ」と湧き上がり、気分的には「その何倍にも長く感じられ」やっとの思いで病院に着いた。

【Y氏の手記1】「彼の顔からは血の気が失せて、顔面蒼白でした。…顔には心細い不安な表情を浮かべていました。こんなに動揺している彼を見るのはこれが初めてでした。…もしかしたら、これだけではすまないかもしれない…という不安が、むくむくと」。

かなり「動揺」していたK氏は、駆けつけたY氏に「肺に肋が刺さってるとか訳分かんないことを言っていました」と振り返る。その後、病院の近くに住むK氏の姉の友人、Y氏の母、Iクラブ関係者、更に北海道からK氏の父や姉が駆けつけた。Y氏が病院に到着すると、間もなくレントゲン等の検査が行われた。この間の様子をK氏はこう語る。

【語り4】「全てが終わってたって感じで。鼻から腕から脇から、で下半身から管が一杯出て…(足は正座の痺れの)何倍も強い痺れだったから、この痺れさえとれば足に力が入るんだろうなって。…自分の頭の中はもう1日も早く復帰しなきゃっていう、天皇杯いついつあるんだそういえば、とかそういうことしか考えられなくて」。

K氏は検査の間、【語り4】のように絶望感を覚えつつも絶えずサッカーのことばかりを考えていた。検査が終わると、Y氏は医師から結果を伝えられた。彼の怪我は重度の胸椎骨折(圧迫脱臼骨折)であり、潰れた骨が粉々になっている

とのことであった。Y氏はショックで「頭の中は空っぽ」になった。間もなく行われた手術の後、車椅子生活になるかもしれないと医師から告げられた。Y氏は「そんなばかな」と更にショックを受けたが、「もしかしたら足の感覚が戻ってくるかもしれない」と「一縷の望み」を持ち、「努めて元気に気丈に振る舞おう」とした。一方、K氏は自身がそんな状態であることをつゆ疑わなかった。「車椅子生活になること」を知ったのは「約2ヶ月後」であった。

それからY氏は、仕事の後に病院に通いK氏の世話を努めたが、立場的に婚約者に過ぎず「物足りなく、寂しく思えました」と言う。K氏の両親から婚約破棄の申し出があり悲しさを募らせた。「一刻も早く（K氏の）家族になりたい」と願うようになった。

【Y氏の手記2】「赤の他人だったのかと思うと、本当に悲しくなりました。…入籍していつも側にいることがわかれば、それがいちばん彼への励ましになる、彼だってきっと、何があっても、どんなことになっても頑張れるに違いないと思いました」。

Y氏のK氏に対する思い（愛情）が【Y氏の手記2】から看取される。K氏は彼女が入籍を求めてきた際、あまりにも急だったため不思議に思ったが、入籍を拒む理由はなく了承した。【語り5】はその時の様子である。この際にもK氏の脳裏からサッカーが離れることはなかった。【語り4】からも、彼のサッカー競技者としての自己ID（即自相）は、どのような状況でも動じないほど強固であったとみられる。

【語り5】「何でこんな時なんだよって、いう風に言ったんですけど、今じゃなきゃだめだって言うから…そんなに言うんなら遅かれ早かれ入籍するんだし…（事故の）11日後に婚姻届けを出したんですよ。…頭の中はもう本当にサッカーのことしかないので、こんなとこに、1日でも早く退院しなきゃって、それしかない

ですよ」。

3. 告知と困難克服へ向けて

Y氏は毎日病院に通ってくれた。K氏が怪我の状態を知ったのは、告知の数日前であった。Y氏が忘れていった手帳を何気なくめくると、それが書いてあった。以前から彼は、「痺れとれない」し「青あざができるまで殴った」が「痛くない、何だろう」と不安に駆られることがあった反面、「またサッカーができるようになる」と希望も抱いていただけに愕然とした。Y氏が「入籍を急いだ理由も分かった」。数日後、K氏は車椅子生活になることを医師から告げられた。彼1人に対し医師側は大勢であり、彼は「平静を装った」。

【語り6】「毎日ばか騒ぎして…おちゃらけてる自分がね、宣告されて、しゅんとなる自分がすごく許せないっていうか…気丈な態度で接してやろうと思ったんですよ。ていうのは、あまりにも人数多くて、何か（自分が暴れるのを）取り押さえるだけの人数がこれだけ来たのかなって…そんなに俺弱くねえよっていう風に思ってた、はい分かりましたって一言ですませた。…でも、それで全てが終わってしまった。もうサッカーできないんだっていう風に思う自分も出てきたし…大丈夫だよ現代の医学は発達してるしっていう自分もいれば…何かこう交互に出てくるんです」。

体裁をとり繕わらざるを得ないK氏の辛い心境が【語り6】から窺われる。彼はY氏の日記をみたことで「心の準備」はできていたが、この際のショックは大きく、至って強固な自己IDさえ揺さぶられるほどの過酷な困難を経験したとみられる^{注12)}。この年はJリーグ元年であり、しかも翌年に結婚式を控えていた。彼にとってみれば、公私ともども晴れ晴れしい門出の年であっただけに事態は一転したと言える。

K氏が経験した困難は2つの種類に大別できよう。1つは、正に本稿の主眼である、サッカー競技者として最初で最後となる現役引退をめぐる

困難、もう1つは、重度障害を負った者なら不可避とみられる障害との闘いをめぐる困難である。むろんこれらは、K氏が順を追って経験したというよりも重層的であったと言えようが、彼の困難克服プロセスを説明するには単純化した方が分かりやすいと考えられるため各局面を分けてみる。

まず、K氏は重度障害により現役引退を余儀なくされ、エリート的サッカー競技者としての自己IDと決別せざるを得ない状況に直面した。彼においては、否応なく非サッカー競技者および身体障害者としての対他相が規範的に生じ、この対他相と上記の強固な即自相とのギャップ、激しいコンフリクトが惹起されたと考えられる。【語り6】に「全てが終わってしまった」とあるが、K氏が絶望感を覚えたのも無理はない。

K氏は、仲のよかった看護師が励ましに来てくれた際にも気丈に振る舞った。「そこからいろんなことを考える自分がいて、そんな時に」Y氏が訪れた。彼は「へこんでいる」状態で、「もう俺サッカーできないの、車椅子の生活になるんだってって話をしたら、妻が泣いてて。そんな時、彼女の泣いている意味がよく分かんなくて。お前、泣けていいよな…俺の気持ち分かんねえだろ」と当たった。その後のことを彼は整然と語る。

【語り7】「そんな時に妻がね、これからは1人じゃないんだし2人で頑張っていこうって言ったんですよ。…2人だったら乗り越えられるって言うてくれたんですけど、うるせえよって感じだった…その日はもう全然食事もしべれず飲み物も飲めず、喋れず…面会に来た選手がいたらいいですけど、え、いたっていい感じぐらい何をしてたのか覚えていないし。その日の夜ですよ…怖くなったんです、これからの自分っていうものが、サッカーできないって思い出したら、こうサッカーのいい場面を思い出したら泣いて思い出したら泣いてっていうのをずっと繰り返して…でその明け方になって…グーって腹減ったんです。…でもその腹減ったと思った時に、ふと気づいたら、自分は、何か物を買

いに行く足がない…そんな時に自分の無力さっていうか、小ささっていうか、もううわーってなったんですよ。何にもできねえって。そんな時にですよ、妻の言葉を、俺1人じゃないんだそういえば、入籍してたとかいろんなこと気づいたわけですよ。…2人だったら乗り越えられるって言葉をかけてくれたなって、すごくそんな時に、(彼女への)申し訳ない気持ちが出た。彼女が車椅子になるってことを承知で入籍してくれた。僕は何てひどいことを言ってしまったんだろうって。で、やっぱりそんな時に、自分はこれから支えていかなきゃいけない彼女ができて、守らなきゃいけない家族ができて、それを考えた時に、サッカーできないことをくよくよ考えてていいのかって思ったんですね。今はそれどころじゃない…1日も早くリハビリして退院することがやるべきことだって…次の日に切り換えた。気持ち的に全部受け入れて切り換えたかっていったら、切り換えられない部分はあったんです。でもやるべきことは…リハビリだったことになったんですよ。それが誰のためっていったら彼女のためですね、家族のため。…(Y氏を)失ったら自分はもうだめだって。…あの時はもう彼女がいなくて自分がどうなっちゃったか分からないぐらい、やっぱり本当に彼女がいてくれて本当によかった」。

K氏はY氏の励ましを受容できず、面会者さえ覚えていないほど絶望の淵に沈んだ。通常、こうした突然の現役引退をめぐる困難を克服するのは容易でなく、競技者としての自己IDの問題を解決するだけでもかなりの時間を要するであろう(豊田・中込, 2000; 吉田, 2006b)。ところが、K氏は一晩という極めて短時間で上述のようなコンフリクトを制御することができた。何故であろうか。【語り7】がこの問いに答えてくれる。

明け方、彼は空腹感を覚えたことを機に無力感に襲われたが、程なく結婚していたことに気づいた。「これからは1人じゃない…2人だったら乗り越えられる」とのY氏の励ましの言葉を思い返し、彼女が「車椅子になるってことを承知」の

上で自分を1人取り残さないでくれたことを悟った。Y氏の熱い思い（【Y氏の手記2】から看取される）が彼に通じたのである。そこまで自分を大切に思ってくれたY氏に暴言を吐いたことへの罪悪感とともに、彼女を「支えていかなきゃ…」との使命感が強烈にK氏に湧き上がった。彼はY氏を「失ったら自分はもうだめ」、また「彼女がいなくて自分がどうなっちゃったか分からない」と語るように、Y氏は彼にとって紛れもなく〈かけがえのない他者〉になったとみられる。こうした他者は、冒頭で述べた重要な他者や「情緒的支援者」（吉田，2001）と括り得るが、それでは語りから読み取れる他者の具象的意味をやはり表現し難いと言えよう。彼は、今は「彼女のため」に「1日も早くリハビリして退院することがやるべきこと」と気持ちを切り換えた。Y氏に対する使命感を原動力として自我IDに当たる位相をおし進め、困難克服に資する内省性を発揮したとみてよい。一先ずエリート的サッカー競技者としての即自相を抑え、非サッカー競技者および身体障害者としての対他相を受け入れたと言えるから、この際の主体的行為は適応的行為となる。こうして彼は、今が「どん底」、これ以上悪くはならないはずだし、Y氏への「恩返し」として「頑張らなければ」と、告知翌日に社会復帰へ向けベッドの上で腕の筋トレを始めた。

【語り8】「どん底っていうのはちょっとですね。通告された時はもうどん底の奈落の底で、その悩んで、迷って、そんで泣いて、で腹減ったってところまでです」。

K氏は「奈落の底」から、わずか一晩で自己IDをめぐるコンフリクトを制御し、前向きにリハビリに臨むに至った。ただし、彼は「全部受け入れて切り換えたかっていったら、切り換えられない部分はあった」（【語り7】）とも語るように、この段階ではまだ現役引退をめぐる困難に終止符を打つことができたわけではなかった。

4. リハビリと車椅子バスケットとの出会い

リハビリは車椅子に乗る練習からであった。腹筋も背筋も機能しなくなった現実は厳しく、暫くは「ベッドの上で座ったままでいられなかった」と言う。「足の痺れや床ずれ」にも悩まされた。リハビリの最中についてK氏はこう語る。

【語り9】「今までサッカーをやってきて辛い練習も一杯やってきたから、ある程度肉体的な辛い部分は我慢できたんですよ。ただ身体的に、そのやっぱり排便排尿のコントロールの部分ができないっていうのが、一番自分がこう、本当に一番苦しかったっていうか、そういう何か人間の尊厳じゃないですか。…俺ってやっぱり障害者なんだみたいなこと思ったりもしてたし。ただそう思っても、やっぱり、常にいつも側にいてくれた彼女がいて、話をして、やれば大丈夫だよって励ましてくれたから、自分でやっぱり頑張るんですね。…1人じゃできないことも2人で乗り越えられるって言ってくれた彼女の言葉が正しくその通りで。彼女が喜んで笑ってくれると、自分がすごく笑えて嬉しくなった。だから頑張れたんです」。

重度障害を負ったK氏は【語り9】のように、自己IDをめぐるコンフリクトを制御できたとはいえ障害との闘いをめぐる困難を経験せざるを得なかった。特に「排便排尿のコントロール」といった「人間の尊厳」に関わる面で苦悩した。身体障害者となった現実が過酷であったが、Y氏の存在によって彼は「頑張れた」。元チームメイト等も度々見舞いに来てくれたが、そうした人達とY氏との存在の大きさは「全然次元が違います」と語る。K氏はY氏という〈かけがえのない他者〉の献身的な支援を得、「彼女のために早く普通の生活に戻らなければ」との思いを強く持ち続け人一倍リハビリに取り組んだ。リハビリの間も、彼女に対する使命感を原動力として内省性をおし進めたと言える。

K氏はリハビリを進めるために転院を2度した。まず、告知から1ヶ月半の頃にT病院へ移

った。そこで彼は、後の人生を大きく左右されることになる人物と出会った。車椅子バスケットの強豪Hクラブのリーダー格O氏である。Y氏が以前、身体障害者手帳の申請のため市役所へ行った際に対応したのが社会福祉課の障害者福祉係長O氏であった。氏は高校時、水泳中の事故による脊髄の血腫が原因で車椅子生活を余儀なくされたが、後には結婚して子どもにも恵まれ、車椅子バスケットの日本代表として活躍した人物であった。O氏はY氏と会った時の様子をこう語る。

【O氏の語り1】「(K氏が) どういうところにいるんだっていう話を聞きましてね、じゃあ1度ちょっと会ってみたいねって話になって、会いに行ってもいいですかって話したら、ぜひお願いしますって。彼女も今後のことがすごく不安だったらいいですよ。でその時に、私もまあ家庭があって、こういう形で家庭を築いてるんだよ、子どもができないとか、そんな心配いらないし、ちゃんとした家庭も築けるんだってことをお話しましたら、すごく顔が明るくなったって記憶があるんです。先がみえないんですね、なった当時は」。

Y氏は、車椅子生活を送る立場から「いろいろアドバイスしてくれる人に出会えたのがとてもうれしく」思った。しかもO氏が親身に接してくれることで、氏に対しK氏がJリーガーだったことなどいろいろと話した。一方、O氏は立場上、Hクラブはもとより車椅子バスケット界の発展のために「リクルート」の「意識もすごく強かった」ため、「病院でこういったのがいるよっていうと、すぐ会いに行ったりしていた」。そうした中で「当然のように(K氏にも) 目をつけた」のである。暫くすると、O氏はK氏のところに立ち寄り「リハビリにもなるから車椅子バスケットをやってみないか」と誘った。

【O氏の語り2】「自分も社会に出るのにバスケットがあったから、今の自分があると思ってるんですね。やっぱり1つの目標があると乗り

越えられるっていうのがあって、彼が今後いい家庭を築くにあたっては、バスケットが、多分スポーツがね、1つのきっかけになるんじゃないかなって。で一応会いに行こうと思って。会いに行った時に、かなり沈んだ表情だったんですね。…でも目はすごくキラキラしたものがあって、こいつバスケットやったらものになるなっていうのがピンときたんですよ。…(車椅子バスケットを) 1回みれば、多分血が騒いでくると思ったんですよ。…自分もそういうタイプだったんで、多分こいつもそうだろうなと…ましてサッカーやってる、コンタクトするスポーツですから、絶対のめり込むなと。…で、じゃあお前ここにいたらだめだからNリハ(Nリハビリセンター)に行けと、俺紹介するから。たまたまそんな時、Nリハのドクターとバルセロナ(パラリンピック)とか行ったりして親交があったもんですから、すぐに電話して、何とか受け入れてくれないかって」。

このようにO氏がK氏を、当初は「いい家庭を築く」手助けとして、換言すれば障害による困難から救おうとして車椅子バスケットに誘ったことは明白である。O氏のような、困難克服の方向を定めるべく能動的に配慮を施してくれる他者を、ここでは〈導く他者〉と呼ぼう。O氏はK氏に会うと、車椅子バスケットへ引き入れる意を強化し、Nリハへの転院を斡旋した。一方、K氏は車椅子バスケットに誘われても「ああ、はあ、みたいな。乗り気じゃなかった」が、O氏に導かれるように数週間後、Nリハへ転院した。通常は数ヶ月待ちのはずだった。「多分Oさん(の尽力)ですね」と彼は言う。「Nリハに行った時に、Oから聞いてるよ、これからビシビシいくから」とスタッフに告げられた。O氏は既にHクラブの次世代を担うメンバーとしてK氏に期待を寄せ、K氏も「Oさんの中では、退院したら(自分が)Hクラブ入ってことを決めてたんでしょね。僕も何かその流れるままに、まあいいかっていう感じだった」と期待を察したとみられる。

やがてK氏は、自身の車椅子の作製に当たったL氏からも車椅子バスケットを勧められたが、この時も気乗りしなかった。K氏はNリハにいる間、初めて車椅子バスケットを体験したが、あくまで「リハビリの一環」に過ぎなかった。Nリハにある車椅子バスケットクラブの練習をみた時は「大したことなく、楽勝じゃん」と思った。K氏は入院中、O氏の導きに反して車椅子バスケットに関心を持つことはなかったが、上述のようにリハビリへの専心といった適応的行為をなし続け、障害との闘いをめぐる困難を克服したと考えられる。通常は1年以上かかるリハビリを半年ほどで終え「普通の生活」に戻った。

5. 困難克服

退院後は、入院中に購入していたマンションで漸く新婚生活を送り始めた。秋には周囲の祝福の下、延期になっていた結婚式を挙げ、新婚旅行にも行った。とはいえ、新婚生活は必ずしも晴れやかなものではなかった。もとより障害者雇用の門戸は狭い上、不況のあおりも受けてK氏はなかなか就職できなかった。無職の間は、さほど多くはない障害者年金と貯金に頼るしかなかった。彼は暫く、ただただ自宅で過ごすばかりであった。

【Y氏の手記3】「仕事もまだ決まらず、私もずっと家にいて、毎日朝起きてから夜寝るまで2人とも、とくにすることもないという生活が続きました。…(K氏は)朝起きて食事をしたら、その後はとくにすることがないし、ごろごろしています」。

K氏は退院したことで、この度の困難を全面的に克服し得たようにも見える。確かに重度障害を負った者は、普通の生活を営めるようになるだけで十分と見做すべきかもしれないが、彼の場合、それだけでは現役引退をめぐる困難が終決したわけではなかった。【Y氏の手記3】によると、彼は退院後に前向きな生活を送っていたとは言えまい。彼においては現役引退にあたり、自己IDの問題とキャリア移行の問題が残されていた。

告知翌日、K氏はY氏のためになすべきことはリハビリだと内省し、非サッカー競技者および身体障害者としての対他相を受け入れたが、「気持ち的に全部受け入れて切り換えたかっていったら、切り換えられない部分はあった」(【語り7】)。つまり、エリート的サッカー競技者としての即自相を消し去ったのではなく、一先ず抑制したに過ぎなかった。20代前半であり、華やかさを増したサッカー界に少し前まで身を置いていた彼にとって、上記の即自相を消し去ることなど容易にできるはずもなかったに違いない。なすべきことを終えて普通の生活に戻った彼は、再びエリート的サッカー競技者としての即自相をめぐる問題に直面せざるを得なかった。彼の場合、こうした自己IDの問題と、加えてキャリア移行の問題は車椅子バスケットによって解決の方向へと向かったと言える。

K氏は徐々に車椅子バスケットに惹かれていく。退院して間もなく、再びO氏に誘われHクラブの練習をみに行った。最初はあまりの激しさに尻込みした。「ここは日本一じゃないですか。…とても無理だ」と思ったが、やがて練習に参加してもいないのに人数合わせのためにと遠征に誘われ、その際にメンバーと打ち解けた。また、【語り10】のように、彼らが活発に動き回る姿を目の当たりにし、車椅子生活を送っていく上で「貴重な刺激」を受けた。K氏はこの時から障害が「あんまり気にならなくなった」と語る。

【語り10】「こういう生き方もあるんだってことを、ここの選手達が教えてくれたんですよ。うわ、こいつらすごいなあって。こういう障害持っててもこんなにできるんだ、自分もああいふ風になりたいなっていう、何か目標じゃないけど。その1つが、エスカレーター乗ってたんですよ、ショッピングセンターで飯食べに行くのに」。

遠征後は練習に時々参加するようになった。ただし、何らかの目標があるわけでもないK氏にとって、「練習は辛いばかり」で「あまり気乗り

しなかった。彼が練習に行くのは「健康維持」や「リハビリ」、それに楽しく刺激的な「選手達」と会うためであった。

【語り11】「最初は楽しい、仲間といることが楽しかったんですよ。仲間と飲みに行ったりするのも楽しくて、…（練習に行ったのも）仲間がいたからじゃないですか、同級生、…5人いたんですよ。いろいろとこれから俺達の時代だみたいなこと話して」。

K氏がこの段階で車椅子バスケットを続けたのは、【語り11】の通り〈仲間〉の存在による面が大きい。やがてK氏は仲間にも勧められ、専用の競技用車椅子を作ることにした。その頃、地元で結婚披露宴を開いたが、「会場が、（K氏は）終わったみたいな、昔の輝きはないみたいな雰囲気」であったため、堪らず「次のオリンピック（パラリンピック）目指して頑張ります」と「宣言してしまった」。こうした言は、K氏が「自分はそういうものを持ってないと、生きていけない」と語るように、彼のプライド（誇り、自尊心）が許さなかったことによるだろうが、その源泉はエリートのサッカー競技者としての即自相に他なるまい。彼はやはりこれを保持しており、それゆえにここで生じた上記の即自相とは正反対と言うべき対他相に反発したとみられる。彼のエリートのサッカー競技者としての自己ID（即自相）は至って強固であったと言えよう。

上記の車椅子が届いてからは上達が早まった。K氏は上達することで、車椅子バスケットの楽しさを感じるようになり積極的になっていった。その様子を彼はこう語る。

【語り12】「それまではサッカーへの未練っていうか、引きずってました。でも車椅子バスケットで自分が動けるようになって、いろんな考えができるようになった時には、もう何か、既に自分はサッカーをやってる気分でした。…サッカーの動きに近い動きをするんですよ、車椅子バスケットは。そういう意味ではすごく楽し

い、…（サッカー競技者としての自分が）そこで活かされた。もう全てですよ。…サッカーの代わり、そうそうそう。今もそうですね。1つのバスの感覚にしても、バスケットの感覚で出したことはないです。サッカーの、足でこういう感じだったことを。…サッカーという競技を車椅子バスケットという競技を借りて、僕はやってるんで、頭の中は常にサッカーをイメージしてるっていうのが本音なんです」。

【語り12】から、彼にとっては車椅子バスケットが「サッカーの代わり」となり得たことが分かる。ここで彼が周囲から得たのは車椅子バスケット競技者としての対他相であるはずだが、「サッカーという競技を車椅子バスケットという競技を借りて、僕はやってる」のが彼の「本音」であり、自身の中ではそれをサッカー競技者としての対他相に置換する形で車椅子バスケットに打ち込むに至ったとみてよい。対他相に彼独自の意味を付与したとも言えるから、この際の行為は創発的行為と捉えられる。こうして彼は、車椅子バスケットに励むことで自己IDおよびキャリア移行の問題を解決する方向へと向かった。

この年の日本選手権で、K氏は早くも公式戦デビューを果たした。翌年1月には、Hクラブのメンバーの情報が基で希望していた福祉方面への就職が決まり、2月には人工受精で長女が誕生した。彼は「娘が生まれてからじゃないですかね。新しく家族ができた時に、あ、本気だと思った」と言う。この時から日本代表、パラリンピック出場という明確な目標を掲げ、「車椅子バスケットを極めよう」と本気で打ち込むようになった。

【語り13】「（娘の誕生以前にも）日の丸の思いとか憧れとか、誇りみたいなものを思い出すことがありました。…パラリンピックを目指すってなったのは、やっぱり娘が生まれてからですね。（それまでは）前向きでいたんですけど、多分横ばいだったと思うんです。このままでいいのかなあみたいな。…娘に誇りに思ってもらえる父親になりたかったんです。初めての子

で、自分の子ですからね。かけがえのない存在ですよ。…元 J リーガーって過去の話じゃないですか。何も誇りに思ってくれないだろうな。その子が成長してって自分ができることっていったら、今始めたばかりの車椅子バスケットでっていう風に思って。この子のためにってやっぱり思いましたね」。

K 氏が自己 ID の問題を解決したのは、娘が誕生してからと言える。【語り13】に「このままでいいのかなあ」とあるように、彼は娘が生まれるまで自身の生き方を自問していた。車椅子バスケットに励みつつ「日の丸の思い…誇りみたいなものを思い出すこと」があった。即自相のエリート的な面からくるプライドが充たされず、何となくではあってもプライドを原動力に内省性をおし進め、プライドに見合う生き方を模索していたと言えよう。それを明確にし得たのは娘の誕生による。彼の言通り、「初めての…自分の子」という〈かけがえのない他者〉が誕生したことで「誇りに思ってもらえる父親」にならなければとの使命感が生じた。彼はそれにより、子どもが誇れる父親となるにはどうすべきかと内省性をおし進め、車椅子バスケットで「パラリンピックを目指す」ことを決意した。

このように K 氏は、エリート的な即自相を源泉とするプライドと、〈かけがえのない他者〉に対する使命感を原動力として自我 ID に当たる位相をおし進め、内省性を発揮しながら上述のような創発的行為を展開していった。そして、車椅子バスケットに本気で打ち込むようになってから「充ちているっていう感じ」を覚えた。エリート的な即自相に見合う対他相を本気で求める（仮設する）ことで、漸く自己 ID をめぐるコンフリクトを解消し、やがて仕事も始まり、職業面でもキャリア移行の問題を解決してこの度の現役引退をめぐる困難を克服するに至ったとみられる。ただし、彼は「仕事は収入を得るためのもの」でしかなく「仕事で頑張れるかっていったら頑張れない」と語るように、その後も自身の中では車椅子バスケットに大きなウェイトが置かれた。

K 氏にとって、エリートのサッカー競技者としての自己 ID（即自相）を変更ないし調整するのは容易でなく、この度の困難を克服するにはとにかくそれに見合う移行先を得ることが鍵であったと言えよう。それゆえ、彼の困難克服プロセスで車椅子バスケットの意義は計り知れないが、彼においてサッカーの代替となり得る、車椅子バスケットとは別の世界の他者とのよき関わりあいがある先行していたならば、キャリア移行の方向は違っていたかもしれない。なお、前述した O 氏は、「(K 氏が) 最初にプレーした時、こいつは（代表レベルに達するまで）4、5 年かかるかなあ」と思ったが「みるみる伸びてきて、3 年ぐらいで仕上がってきた」と語る。K 氏は 2 年後には関東選抜に、3 年後には O 氏がヘッドコーチを務める日本代表の候補に選ばれた。翌年、日本選手権で個人のベスト 5 に名を連ねるとともに、いよいよ日本代表の座を勝ち取りパラリンピックに出場した。K 氏は車椅子生活を余儀なくされたことについて、むしろ「それによって自分が成長できた」とプラスに捉えている。そして、「今は幸せ」であると言う。

Ⅳ. ま と め

本稿は、競技者の現役引退ならびに困難克服に関して臨床（実践）的寄与を意図する研究の一環として、交通事故で身体に重度障害を負った元 J リーガー K 氏を取り上げ、彼が現役引退をめぐる深刻（過酷）な困難を克服していくプロセスについて社会的視座から語りを基に解明すること、また、それを通じて競技者の現役引退をめぐる困難克服のための要点を導出することを目的とした。次に、彼の困難克服プロセスをまとめた上で、競技者の現役引退をめぐる困難克服のための要点を導出し目的を遂げたい。

K 氏においては強固なエリートのサッカー競技者としての自己 ID が形成されており、現役引退をめぐる困難は、この ID の即自相と新たに規範的に生じた対他相とのコンフリクトと捉えられた。そうした困難克服プロセスには、コンフリク

トを制御する局面と解消する局面とが認められた。彼はこのうち前者と、障害との闘いをめぐる困難を克服する局面で、〈かけがえのない他者〉（妻）に対する心情（使命感）を原動力として自己 ID に当たる位相をおし進め、困難克服に資する主体性（内省性）を発揮した。コンフリクトを解消する局面では、〈導く他者〉の配慮とともに〈仲間〉のサポートを得て車椅子バスケットへのキャリア移行の緒についた。やがて車椅子バスケットがサッカーの代替となり得たこと、換言すれば車椅子バスケットで自己 ID（即自相）のサッカー競技者の面が充たされたことでほとんど移行先を定めた。更に、自己 ID（即自相）のエリート的な面を源泉とする心情（プライド）、および〈かけがえのない他者〉（娘）に対する心情（使命感）を原動力に主体性（内省性）を発揮し（自我 ID に当たる位相をおし進め）、車椅子バスケット日本代表といった、エリート的な即自相に見合う対他相を本気で求める（仮設する）ことでコンフリクトを解消した。間もなく定職に就いて職業面でもキャリア移行の問題を解決し、この度の困難を克服するに至ったとみられる。

以上の知見から、とりわけエリート的当該種目競技者としての自己 ID が強固な者における、現役引退をめぐる困難克服のための要点が導出される。そのためには結局、上記の自己 ID とキャリア移行先との均衡が求められるのであり、そうした移行先を得るために〈導く他者〉のごとき他者の機能の有効性が認められる。ただし、困難克服に資する主体性発揮の原動力と言うべき心情、その源泉となり得る〈かけがえのない他者〉や上記の自己 ID、それに困難克服へ向けた営みのサポート役となり得る〈仲間〉の重要性も看過してはならない。なお、K 氏は自己 ID の当該種目競技者としての面の代替となり得る移行先を得ることができたが、こうしたケースは稀であろう。基本的には自己 ID のバランスを保ち得る移行先を得るか、それが不可能ならば自己 ID を変更ないし調整し、それ相応の移行先を見出すことで困難を克服するより他はないと言えよう。

本稿では、昨今の社会化論の課題克服に資する

主体的行為に関する理論的枠組みを援用したことで、K 氏が他律的、規範的に惹起された困難を、主体性をおし進め克服していくプロセスを理論的に捉えることができた。こうした個人の（再）社会化プロセスにおける主体的側面と社会（規範）的・受動的側面とのダイナミズムは従来、課題とされながらほとんど捉えられることはなかった。ただし、彼の困難克服プロセスは、偏に上記の枠組みで捉え得るものでもなく、主体性を突き動かす心情と他者を抜きに語ることのできないものであった。冒頭で述べたように、競技者の困難克服に関する先行研究でも心情と他者は要因として認められているが、本稿では他者の具象的意味に留意したことで、新たに意味を異にする複数の他者が見出され、各々を概念化することができた。

最後に今後の課題を述べる。本稿では、変更ないし調整の困難な自己 ID に見合うキャリア移行先を得た事例を取り上げた。それとは対照的なタイプ、つまり困難克服にあたり自己 ID に見合う移行先が得られず、自己 ID を変更ないし調整せざるを得なかった事例を対象とすることが主な課題として挙げられる。また、方法については、臨床（実践）的寄与を意図するならば、データの収集も臨床（実践）的であることが望ましい。競技者の現役引退をめぐる困難克服プロセスに関する研究は緒についたばかりである。方法の精緻化を図りつつ、いずれの対象についても研究を蓄積していくことが求められる。

付記

本稿は、筑波大学大学院人間総合科学研究科へ 2010 年度に提出した博士論文の一部を大幅に加筆修正したものである。

注

- 注 1) 本稿では青年期を、一般的見解（松村監修、1995）、発達心理学の説（岡本、1994、pp. 10-12）、更に社会学の説（栗原、1988）を踏まえ、およそ 10 代半ばから、終わりは 20 代半ばから 30 代まで個人差が大きいものと捉えるが、わが国における職業面の進路決定時期は、一般に大学生年代以降（18 歳頃以降）であるから、ここで青年期と

言う際には特に大学生年代以降を指す。

- 注 2) 本稿で言う困難克服とは、個々が困難を経験する状況から、一先ずこの状況を脱却して前向き、積極的に次なる状況へ向けて歩み出すことを意味する。
- 注 3) 障害者スポーツに関する研究では、「スポーツを実践している『障害者』の姿や経験が議論から遠景化してしまっていた」(渡, 2005, p. 39) という課題がある。本稿はこうした点も捉えるから、障害者スポーツに関する研究の面でも有意義と言えよう。また、K氏は車椅子バスケット界へのキャリア移行、換言すれば車椅子バスケットへの社会化を遂げる形で困難を克服したとみられるため、彼の困難克服プロセスの検討は同時に車椅子バスケットへの社会化の検討に通じる。それゆえ、本稿は障害者のスポーツへの社会化に関する研究の一環としても位置づけられる。藤田(1998)は先天的身体障害者のスポーツへの社会化について検討し、今後の課題として後天的身体障害者を対象とすることを挙げている。本稿はこの種の研究の蓄積・発展へ向けた試みでもある。
- 注 4) 上記の先行研究(吉田, 2006a; 吉田・中島, 2007)もインタビューによるライフヒストリー法を用いているが、いずれも記述が薄いと言わざるを得ない。本稿はそうした課題の克服を意図するものである。なお、対象者からは実名を表記してよいと言われたが、実名を表記した場合の読者へのインパクトを想定するとともに、その場合は「予測できない迷惑が、本人ないし関係者にかかるおそれがある」(桜井, 2002, p. 60)ことを考慮に入れ匿名とする。
- 注 5) 社会化論で課題とされている個人の主体性とは、我々が日常的、一般的に言うような行為の主体性を意味する。社会学的視座からは、正しく行為論の観点から主体性を捉えようとする見解が主流とみられる。本稿では、そうした見解を示す柴野(1977)、渡辺(1981)、それに紅林(1988)に依拠し、主体性を主観性と自律性との2つの意味を有するものと把握する。
- 注 6) 問題状況(“problematic situation”)とはMead(1938)が称したものであり、「従来の習慣的やり方が妨害されたり、禁止されたり、あるいはまた、全く新しい事態が生じて、それが通用しなくなるような状況」(船津, 1983, p. 96)を表す。船津は、これを「問題状況」(船津, 1983, p. 96)と訳すが、ここでは慣用的に問題状況と呼ぶ。

- 注 7) エリクソンがアイデンティティを探究したのは、特に民族や国籍をめぐり自身の再規定に迫られた複雑な生い立ちによるとみられる(仁科, 1980; エヴァンズ, 1981)。実際に民族アイデンティティ(ethnic identity, racial identity)に着目した研究は従来、夥しい数に及ぶ(村山ほか, 1995)。この意味で、アイデンティティ論は越境者等を分析する枠組みとして文脈的に適しているとも言えよう。
- 注 8) 中込(1993)は青年期の競技者のIDについて探究したが、ここでは氏のIDの捉え方とは視点が異なり、主体的行為に関する理論的枠組みとしてのID論を捉え直すことが課題となる。
- 注 9) 西平は教育学の立場から、「エリクソン研究にとって重要なのは、あくまでエリクソンの言葉にこだわりの一方、それをエリクソン自身の経験へとさかのぼらせ、他方で、そこに読み手自身の経験を重ねあわせてゆくという二つの作業を、同時並行させること」としてエリクソンの理論を改めて解釈する。氏の議論は、「エリクソンの理論全体」を「エリクソンの人間学」と呼び、「方法論・発達論・自我論という三つの話を切り口」に「再構成」したものである(西平, 1993, pp. 1-6)。
- 注 10) こうした社会化論の課題については紅林(1989)、北村(1990)を参照されたい。スポーツ社会学の社会化論でも同様の課題が指摘された(岡田・山本, 1984; 山口・池田, 1987)。
- 注 11) ミードとエリクソンの学説的立場は異なるが、両者の結節点がジェームズの自我心理学にあることは確かである。ミードが言う主我(I)と客我(me)はそもそもジェームズの用語である。ミードはジェームズにおける「社会的客我」に着目し、自我の社会性を示そうとしたとみられる(ジェームズ, 1992, pp. 245-272)。主我についてもミードとジェームズの捉え方に違いはない(ジェームズ, 1992, pp. 272-301)。ミードとジェームズの関係性の詳細については徳川(2006)を参照されたい。また、エリクソンはID論を展開する中でジェームズの自伝を引き合いに出している(エリクソン, 1982, pp. 201-209, pp. 282-288)。特にそこにおける主我の意味内容に関わる見解がID論の1つの「源泉」(エリクソン, 1982, p. 210)となっていることを踏まえると、ID論がミード自我論と論理的に同形であることは何ら不思議なことではない。
- 注 12) 上野はID概念に関する学説史の系譜を辿り、

現代社会で「多くの人々は、アイデンティティの統合を欠いても逸脱的な存在になることなく社会生活を送っている」ことから「一貫性のある自己とは、誰にとって必要だったのか？」（上野，2005，p. 35）と疑問を呈する。しかしながら，K氏のようなエリートのサッカー競技者としての強固な自己IDが形成された者にとってみれば，それが可変的なものであったとしても自己IDの統合を欠いた事態，危機的事態はやはり深刻であるに違いない。

文 献

- コークリー：小椋 博訳（1982）プロフェッショナル・スポーツ。影山 健ほか訳 現代のスポーツその神話と現実。道和書院：東京，pp. 179-199。〈Coakley, J.J. (1978) Sport in society-issues and controversies. Mosby: Saint Louis.〉
- Drahota, J. and Eitzen, D. (1998) The role exit of professional athletes. *Sociology of Sport Journal*, 15: 263-278.
- エリクソン：小此木啓吾訳編（1973）自我同一性。誠信書房：東京。〈Erikson, E.H. (1959) Identity and the life cycle. International Universities Press: New York.〉
- エリクソン：岩瀬庸理訳（1982）アイデンティティ。金沢文庫：東京。〈Erikson, E.H. (1968) Identity—Youth and crisis. W.W. Norton & Company: New York.〉
- エヴァンズ：岡堂哲雄・中園正身訳（1981）エリクソンは語る。新曜社：東京，pp. 34-52。〈Evans, R.I. (1967) Dialogue with Erik Erikson. Harper & Row: New York.〉
- 船津 衛（1983）自我の社会理論。恒星社厚生閣：東京。
- 古市裕一（1990）成人期社会化の問題。斎藤耕二・菊池章夫編 社会化の心理学/ハンドブック。川島書店：東京，pp. 233-249。
- 藤田紀昭（1998）ある身体障害者のスポーツへの社会化に関する研究—車いすバスケットボールプレイヤーの個人史より—。スポーツ社会学研究，6: 70-83。
- 後藤将之（1988）意味ある他者。見田宗介・栗原 彬・田中義久編 社会学事典。弘文堂：東京，p. 58。
- 井上 俊・船津 衛編（2005）自己と他者の社会学。有斐閣：東京。
- ジェームズ：今田 寛訳（1992）心理学（上）。岩波文庫：東京。〈James, W. (1892) Psychology, Briefer course. Dover: New York.〉
- 北村 薫（1990）ライフコース分析と社会化。教育社会学研究，46: 35-51。
- Kleiber, D. and Brock, S. (1992) The effect of career-ending injuries on the subsequent well-being of elite college athletes. *Sociology of Sport Journal*, 9: 70-75。
- 小林多寿子（2000）二人のオーサー。好井裕明・桜井厚編 フィールドワークの経験。せりか書房：東京，pp. 101-114。
- 小丸 超（2010）スポーツ選手の引退に関する一考察—日本野球独立リーグの場合—。ソシオロジ，55 (2): 73-88。
- 紅林伸幸（1988）〈主体性〉概念の検討—行為の「主観性」と「独立性」をめぐる—。東京大学教育学部紀要，28: 263-271。
- 紅林伸幸（1989）社会化：間主観性と認知発達の交錯—共生社会の基礎理論—。教育社会学研究，45: 109-122。
- 栗原 彬（1988）青年期。見田宗介・栗原 彬・田中義久編 社会学事典。弘文堂：東京，p. 539。
- 草津 攻（1977）アイデンティティと社会。現代社会学7, 4 (2): 32-53。
- Lavallee, D. and Wylleman, P. (2000) Career transitions in sport: International perspectives. *Fitness Information Technology*: West Virginia.
- Lerch, S. (1984) Athletic retirement as social death: An overview. In: Theberge, N. and Donnelly, P. (Eds.) Sport and the sociological imagination. Texas Christian University Press: Fort Worth, pp. 259-272。
- 松村 明監修（1995）大辞泉。小学館：東京，p. 1472。
- Mead, G.H. (1938) The philosophy of the act. University of Chicago Press: Chicago, p. 6。
- 村山満明・山本雅美・小松貴弘・鈴木健一（1995）民族アイデンティティに関する研究。鑑幹八郎・宮下一博・岡本祐子共編 アイデンティティ研究の展望Ⅱ。ナカニシヤ出版：京都，pp. 128-178。
- 中込四郎（1993）危機と人格形成。道和書院：東京。
- 西平 直（1993）エリクソンの人間学。東京大学出版会：東京。
- 仁科弥生（1980）解説。エリクソン：仁科弥生訳 幼児期と社会2。みすず書房：東京，pp. 211-241。
- Ogilvie, B. and Howe, M. (1986) The trauma of termination from athletics. In: Williams, J. (Ed.) Applied sport psychology. Mayfield: California, pp. 365-382。
- 岡田 猛・山本教人（1984）スポーツと社会化論についての一考察—Social Agent と Socializee の相互作用

- 用の観点から一. 体育・スポーツ社会学研究, 3: 79-95.
- 岡本祐子 (1994) 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究. 風間書房: 東京.
- Rosenberg, E. (1984) Athletic retirement as social death: Concepts and perspectives. In: Theberge, N. and Donnelly, P. (Eds.) Sport and the sociological imagination. Texas Christian University Press: Fort Worth, pp. 245-258.
- 崎山治男 (2008) 〈支援〉の社会学に向けて. 崎山治男・伊藤智樹・佐藤 恵・三井さよ編 〈支援〉の社会学. 青弓社: 東京, pp. 9-17.
- 桜井 厚 (2002) インタビューの社会学. せりか書房: 東京.
- 柴野昌山 (1977) 社会化論の再検討—主体性形成過程の考察—. 社会学評論, 27(3): 19-34.
- Stier, J. (2007) Game, name and fame—afterwards, will I still be the same?: A social psychological study of career, role exit and identity. International Review for the Sociology of Sport, 42: 99-111.
- 鈴村裕輔 (2008) 日本プロ野球におけるセカンドキャリア形成の現状と課題. ベースボール, 9: 178-186.
- 高橋 潔・重野弘三郎 (2010) Jリーグにおけるキャリアの転機—キャリアサポートの理論と実際. 日本労働研究雑誌, 603: 16-26.
- 谷 富夫 (1996) ライフ・ヒストリーとは何か. 谷富夫編 ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために. 世界思想社: 京都, pp. 3-28.
- 徳川直人 (2006) G・H・ミードの社会理論—再帰的な市民実践に向けて. 東北大学出版会: 仙台, pp. 125-135.
- 豊田則成・中込四郎 (1996) 運動選手の競技引退に関する研究: 自我同一性の再体制化をめぐる. 体育学研究, 41: 192-206.
- 豊田則成 (1999) アスリートの競技引退に伴うアイデンティティ再体制化に関する研究—中年期危機を体験した元オリンピック選手—. スポーツ教育学研究, 19: 117-129.
- 豊田則成・中込四郎 (2000) 競技引退に伴って体験されるアスリートのアイデンティティ再体制化の検討. 体育学研究, 45: 315-332.
- 上野千鶴子 (2005) 脱アイデンティティの理論. 上野千鶴子編 脱アイデンティティ. 勁草書房: 東京, pp. 1-41.
- 渡辺秀樹 (1981) 個人・役割・社会—役割概念の統合をめざして—. 思想, 686: 98-121.
- 渡 正 (2005) 「健常者/障害者」カテゴリーを揺るがすスポーツ実践—車椅子バスケットボール選手の語りから—. スポーツ社会学研究, 13: 39-52.
- Werthner, P. and Orlick, T. (1986) Retirement experiences of successful Olympic athletes. International Journal of Sport Psychology, 17: 337-363.
- 山口泰雄・池田 勝 (1987) スポーツの社会化. 体育の科学, 37(2): 142-148.
- 吉田 章・佐伯年詩雄・河野一郎・田嶋幸三・菊 幸一・大橋 仁 (2006) トップアスリートのセカンドキャリア構築に関する検討 (第1報). 筑波大学体育科学系紀要, 29: 87-95.
- 吉田幸司・河野一郎・吉田 章・菊 幸一・相馬浩隆・三宅 守・片上千恵・佐伯年詩雄 (2007) トップアスリートのセカンドキャリア構築に関する検討 (第2報) 海外先行事例調査を中心に. 筑波大学体育科学系紀要, 30: 85-95.
- 吉田 毅 (1990) スポーツの社会化における「主体的—受身的論争」の検討—主体的自我論を基底として—. 体育・スポーツ社会学研究, 9: 103-122.
- 吉田 毅 (1992) スポーツ社会学における社会化論への一視角: 主体性をめぐって. 体育学研究, 37: 255-267.
- 吉田 毅 (1999) スポーツ選手の現役引退に関する社会学的研究の視点. 九州体育・スポーツ学研究, 13: 75-84.
- 吉田 毅 (2001) 競技者の困難克服の道筋に関する社会学的考察: 主体的社会化論を手がかりに. 体育学研究, 46: 241-255.
- 吉田 毅 (2006a) 競技者の転身による困難克服の道筋に関する社会学的考察: 元アメリカ杯挑戦艇クルーを事例として. 体育学研究, 51: 125-138.
- 吉田 毅 (2006b) アスリートのキャリア問題. 菊 幸一・清水 論・仲澤 眞・松村和則編 現代スポーツのパースペクティブ. 大修館書店: 東京, pp. 210-227.
- 吉田 毅・中島千恵子 (2007) 後天的身体障害者である元Jリーガーの車椅子バスケットボールへの社会化過程—困難克服の道筋に着目して—. 東北工業大学紀要Ⅱ, 29: 19-27.

(平成24年3月1日受付)
(平成24年8月3日受理)